

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 3162 号	氏 名	大戸 祐治
論文審査担当者	主査 藤田 健一 教授		
	副査 石野 敬子 教授		
	副査 谷岡 利裕 准教授		
<p>論文題名 : Transdermal fentanyl usage in working-age patients undergoing cancer treatment: Prescription pattern analysis using large claims data in Japan. (就労年齢がん患者におけるフェンタニル貼付剤の使用状況：日本の社会保険レセプトデータを用いた処方パターンの分析)</p> <p>掲載雑誌名(巻・号・頁・掲載年) : Journal of Pain and Palliative Care Pharmacotherapy に掲載予定</p> <p>本研究では、フェンタニル貼付剤を使用した就労年齢のがん患者における、(1) フェンタニルとの併用による呼吸抑制などの副作用についてFDAが警告を発している、ベンゾジアゼピン系薬剤の併用の実態、(2) フェンタニルの吸収を促進することが知られている発熱と関連する要因、について日本医療データセンターの社会保険レセプトデータを用いて後ろ向きに調査した。</p> <p>本研究により得られた結果を以下に示す。(1)フェンタニル貼付剤とベンゾジアゼピン系薬剤の併用率は、貼付剤初回投与時に16.5%であったが、調査期間終了の30日後までに39.3%まで上昇した。(2)多く併用されたベンゾジアゼピン系薬物は、ブロチゾラム(14.6%)とゾルピデム(10.1%)であった。(3)併用期間の中央値は12日(範囲 2-30日)であった。(4)フェンタニル貼付剤を投与した患者の発熱と関連した因子は、男性(オッズ比1.99 95%信頼区間[1.23-3.23]、p=0.005)、消化器系がん(オッズ比1.73 95%信頼区間[1.27-2.73]、p=0.0006)、血液がん(オッズ比2.02 95%信頼区間[1.16-3.50]、p=0.0127)、腎疾患(オッズ比1.73 95%信頼区間[1.15-2.61]、p=0.0084)であった。これらのビッグデータから得られた結果を臨床研究にて検証していくことにより、就労年齢のがん患者におけるフェンタニル貼付剤の適正使用法に繋げていくことが可能であると考えられた。</p> <p>以上のことから、本論文は本学大学院学位論文(博士)審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。</p>			

(主査が記載)